原　田　遺　跡　2

－第２・３次調査－

大野城市文化財調査報告書　第171集

序

福岡県大野城市は福岡平野の南部に位置し、その市名は日本最古の朝鮮式山城「大野城」に由来します。市域は中央部がくびれ、南北に細長いヒョウタン形をしていますが、北部に大野城跡、中央部に水城跡、南部に牛頸須恵器窯跡と、それぞれ国指定史跡を配し、それらを中心に数多くの文化財を擁する歴史豊かな街です。

本書で報告する原田遺跡は、市域の北部、特別史跡の大野城が所在する大城山の西山麓に広がる、なだらかな丘陵上に位置し、2017年度に行われた第１次の調査で初めて遺構の存在が知られた遺跡です。今回、第２次及び第３次の調査を実施しましたが、調査の結果、古墳時代後期の遺構や遺物を検出しました。調査範囲が狭小で、その性格等不明な部分がありますが、一帯に古墳時代中期～後期の集落遺跡が広がることを確認できました。

原田遺跡の北側では乙金第二土地区画整理事業に伴う発掘調査が実施され、善一田遺跡群や古野遺跡など古墳時代の遺構がたくさん見つかっており、全国的に見ても貴重な成果が上がっています。これらの成果や今回の調査の成果を合わせると大城山西山麓の古墳時代史を明らかにする手がかりの一助となることが期待されます。

本書が広く周知され、考古学の深化や文化財の保護等に活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、本調査にご理解ご協力いただいた土地所有者をはじめ関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成31年３月29日

大野城市教育委員会
教育長　吉富　修

例　　言

１．本書は、大野城市大城３丁目160－9の宅地造成に伴う事前の発掘調査として実施した原田遺跡第２次調査及び大野城市大城３丁目160－11で実施した同第３次調査の発掘調査報告書である。

２．調査は２次・３次とも大野城市教育委員会が調査主体となり、国庫補助事業として実施した。

３．本書に使用する実測図は遺構を澤田康夫、柴田　剛、神　啓崇が、遺物を椎葉実郁、永江里沙、三浦　萌が作成し、製図は三浦が行った。

４．本書で使用する写真は現場の遺構写真を澤田、神が、遺物写真は写測エンジニアリング㈱に委託し、牛嶋　茂が撮影したものを使用した。

５．本書の遺構平面図中の方位は、磁北を示す。

６．本書の遺跡分布図は国土地理院発行の25000分の1地形図『福岡南部』を使用し、近隣の遺跡包蔵地分布図を参考に作成した。

７．本書の執筆・編集は澤田が行った。

８．本書掲載の遺物・写真は大野城市教育委員会で保管している。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに …… 1

Ⅱ．立地と環境 …… 3

Ⅲ．調査の内容 …… 5
　１．第２次調査 …… 5
　２．第３次調査 …… 9

Ⅳ．まとめ …… 12

図　版　目　次

図版１　第２次調査全景・各遺構細部
図版２　第３次調査全景・調査区細部
図版３　出土遺物１
図版４　出土遺物２

挿　図　目　次

第１図　調査位置図 …… 2
第２図　周辺遺跡分布図 …… 4
第３図　第２次調査遺構配置図 …… 5
第４図　各土坑実測図 …… 6
第５図　各遺構出土土器実測図 …… 7
第６図　第２次調査包含層出土土器実測図 …… 8
第７図　第３次調査遺構配置図 …… 9
第８図　溝状遺構出土土器実測図 …… 10
第９図　第３次調査包含層出土土器実測図 …… 11

Ⅰ．はじめに

１．調査の経過

原田遺跡は大野城市大城３丁目を中心として広がる遺跡群で、南に金山遺跡、曲り目遺跡等と隣接している。1980年に出された福岡県遺跡等分布図には縄文時代の遺跡として記載されているが、その実態は不明確であった。遺跡の所在する丘陵地は古い時期に宅地造成され、低層住宅が立ち並んでいて、それらの住宅の改築や新期建築にあたって、度々試掘調査等で確認調査を実施し、包蔵範囲の把握に努めてきたが、何れも発掘調査には至らず、平成27年度になって大城３丁目235において、初めて発掘調査が実施され、古墳時代中期の住居跡が確認された。

調査地は既存の宅地であったが、住居は解体され、新たに盛土がされていた。この一宅地を２区画に分筆し、それぞれに住宅を新築する計画があり、事前の試掘調査を実施したところ、遺物、遺構が確認され、その結果を受け、事業者と当該文化財の保護措置について協議を重ねた。当該地は盛土が厚くなされ、一般的な住宅の基礎では地下の文化財に影響を与えないものであるが、基礎杭を打つ工法がとられ、文化財に影響を及ぼすため、発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は大野城市大城３丁目160－9を第２次調査として、平成29年８月17日から厚い盛土を域外へ搬出する作業を開始したが、予想外の土量で、搬出に手間取った。また、遺構検出面まで深く、トレンチ壁の安全傾斜を確保すると、狭い範囲の調査区となった。８月23日から作業員を投入し作業を進め、８月30日現場での調査は終了し、再度搬出していた盛土を埋め戻す作業を行い、同年９月８日に全ての作業を終了した。

第３次の調査は大城３丁目160－11に分筆された隣地で実施した。先に第２次調査を実施した土地には住宅が新築され、狭い敷地内で第２次調査より更に困難な調査で、調査範囲も十分に取れなかった。調査は平成29年10月11日から盛土の区域外への搬出をはじめ、10月17日から作業員を入れて調査を開始した。10月20日に調査は終了し、その後埋戻しを行って、同年10月27日にすべての作業を終了した。

２．調査の組織

発掘調査及び本書発行の整理作業にかかる調査体制は以下のとおりである。

教育長	吉富　　修
教育部長	平田　哲也
ふるさと文化財課長	石木　秀啓
係長	徳本　洋一、白壁　伸太（29年度）、佐藤　智郁、林　潤也
主任技師	上田　龍児
技師	藤井　恵美、山元　瞭平

主事　　柴田　剛、坂井　貴志、鮫島　由佳

嘱託　　澤田　康夫、三浦　萌、神　啓崇、藤川　貴久、山村　智子

　　呉羽　京子（庶務）

整理作業員　　松岡　信子、町井　裕子、村山　律子、白井　典子、仲村　美幸

　　小嶋　のり子、宮野　綾、津田　りえ、松本　友里江

第1図　調査位置図（1 第1次調査、2 第2次調査、3 第3次調査）

II．立地と環境

１．遺跡の立地

大野城市の市域は南北に細長く、中央部がくびれるヒョウタン形をしている。北部には四王寺山山塊とそこから南西に派生する低丘陵群､南部には牛頸山山塊とそこから派生する低丘陵群があり、両者に挟まれる中央部は御笠川による沖積地及び氾濫原の低地をなしている。南部の牛頸山は脊振山系の一角をなし、地盤は早良型花崗岩で、表層はその風化土である真砂土が覆う。原田遺跡は東方の四王寺山から西へ派生する解析の進んだ低丘陵群の一つに立地する。

２．歴史的環境

本遺跡の周辺では、旧石器時代より遺跡の分布が見られる。雉子ヶ尾遺跡、釜蓋原遺跡、松葉園遺跡等でナイフ形石器が出土している。続く縄文時代でもこれらの遺跡は継続され､雉子ヶ尾遺跡、釜蓋原遺跡などで、押型文土器が出土している。弥生時代では本遺跡周辺での遺構・遺物の検出は極めて少ない。乙金地区の区画整理事業地内でも薬師の森遺跡で突帯文土器や板付Ⅰ式土器など早期の遺構・遺物は僅かに確認されるが、いずれも小規模で、この時期の集落や墳墓の主体は更に西に下った丘陵先端部で営まれる御陵前ノ椽遺跡､中･寺尾遺跡､森園遺跡がある。市域全体でみると、前期の遺跡は市域の北部に多く、御陵前ノ椽遺跡、中･寺尾遺跡、塚口遺跡で甕棺墓等が営まれる。集落では、仲島遺跡、石勺遺跡、ヒケシマ遺跡などがある。市域外では、北方に弥生初期の環濠集落である那珂遺跡や板付遺跡があり、この板付遺跡から西方へ諸岡遺跡、井尻遺跡などがある。古墳時代になると、那珂遺跡に福岡平野最古の前方後円墳である那珂八幡古墳が造られ、それ以降、那珂川流域を主に系譜をたどれる前方後円墳群が連綿と営まれる。市域の古墳時代前期の遺跡は少ないが、本遺跡の西にある金山遺跡では、この時期の複数の竪穴住居址が発見され、集落の様相が明らかになりつつある。また、首長墓級の前方後円墳は認められないが、本遺跡の北方２㎞の所にある御陵古墳群からは三角縁神獣鏡の出土が伝えられ、那珂川市の妙法寺２号墳と並行する古墳時代初期の有力者の存在を示している。中期では、笹原古墳、成屋形古墳、古野古墳群などの築造が行われるが、集落遺跡は希薄で不明な部分が多いものの、本遺跡群の第１次調査で、この時期の住居址を検出しており、一帯での中期集落の展開が期待される。後期になると遺構・遺物は増加し、薬師の森遺跡では６世紀後半から集落の形成が認められ、鞴羽口、鉄滓、新羅系土器などの出土遺物から鉄器生産や周辺で須恵器窯跡も確認されていることから、それら生産活動に携わる渡来系集団の存在が推定されている｡100棟にも及ぶ大規模な集落であったが､７世紀前半には終焉している。古墳群の造営は６世紀後半ごろから盛んとなり、乙金山、大城山の西山麓に群集墳が営まれる。本遺跡の同一丘陵上位にも古墳の残骸が数か所認められるが、持田ヶ浦古墳群、善一田古墳群、王城山古墳群などがあり、善一田18号墳は６世紀後半頃の一帯の盟主墳として注目される。生産遺跡は６世紀中頃から雉子ヶ尾窯跡群、乙金窯跡群などがあるが、何れも数基程度で散在し、南部の牛頸窯跡群とは様相を異にする。

【大野城市】

1．原田遺跡
2．乙金北古墳群
3．善一田古墳群
4．王城山古墳群
5．古野古墳群
6．原口遺跡
7．薬師の森遺跡
8．原口古墳
9．雉子ケ尾遺跡
10．雉子ケ尾古墳群
11．雉子ケ尾遺跡Ⅲ
12．中ノ原遺跡
13．釜蓋原遺跡
14．曲り目遺跡
15．金山遺跡
16．金ヶ浦遺跡
17．笹原古墳
18．御陵古墳群
19．松葉園遺跡
20．花園遺跡
21．森園遺跡
23．中・寺尾遺跡
24．ヒケシマ遺跡
25．ウド遺跡
26．仲島遺跡
27．川原遺跡
28．御笠の森遺跡
29．宝松遺跡
30．村下遺跡
31．雑餉隈遺跡
32．錦町遺跡
33．石勺遺跡
34．瑞穂遺跡
35．国分田遺跡
36．原ノ畑遺跡
37．大道端遺跡
38．後原遺跡
39．御供田遺跡
40．ハザコ遺跡

【福岡市】

41．井相田Ｃ遺跡
42．麦野Ｃ遺跡
43．雑餉隈遺跡群

【春日市】

44．駿河遺跡
45．立石遺跡

【太宰府市】

46．成屋形古墳群
47．裏ノ田遺跡
48．陣の尾古墳群・遺跡群

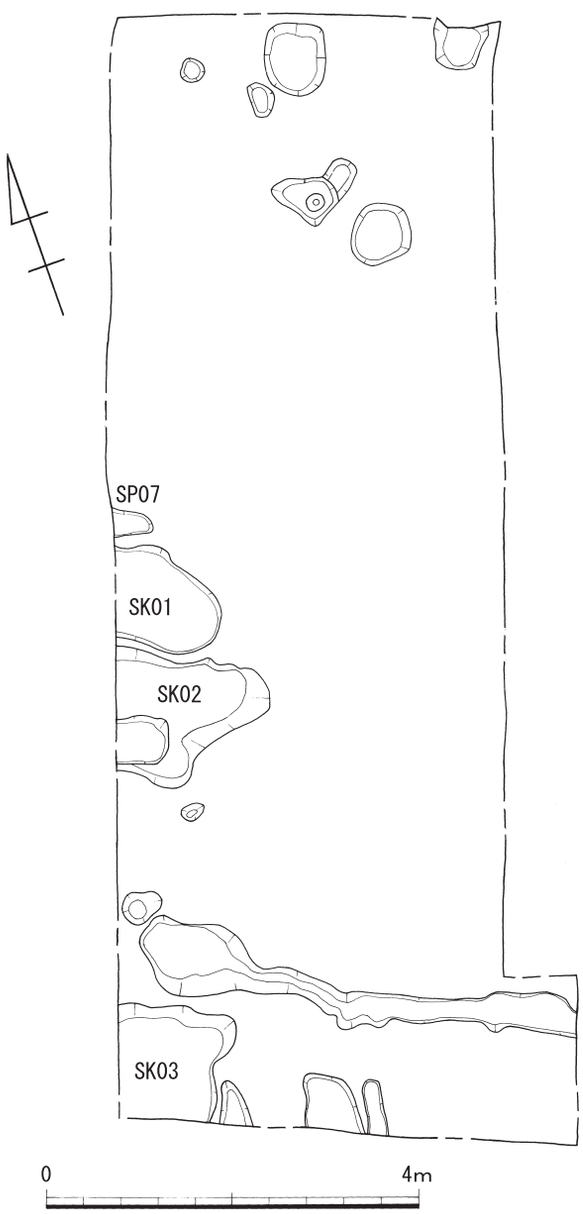
第2図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

Ⅲ．調査の内容

１．第２次調査

（１）調査の概要

調査地は大城３丁目160－9に所在し、第１次調査地点から東へ120m程の地点である。後世の真砂土の盛土が著しく、場内で排土を仮置きできないため、場外へ持ち出すことにした結果、遺構面に到達するまでに、時間を費やした。また、敷地が狭いうえに安定傾斜を保って掘り下げたため、調査できたのは約50㎡の狭い範囲であった。調査は重機により遺構面まで下げたが、真砂土の盛土を除去すると､旧耕作面が現れ、床土の下はすぐ礫を含む黄白色土層となり一部礫帯を含む遺構面を成している。土層の観察では、おそらく宅地造成の際に地山が削平されていると見られる。また、遺構面と同一レベルの礫帯中には須恵器などの土器片が混入しており、土砂の流れがあったことをうかがわせる。



第3図　第2次調査遺構配置図

（２）検出遺構

検出した遺構は土坑３基、ピット11個、溝状遺構などがあるが、土坑は不整で、ピットも建物として拾えるものはなく、いずれも性格は不明である。以下、主な遺構について述べる。

土坑

ＳＫ01（図版１、第４図）

調査区西辺の中央付近で検出した。調査区外へ伸びるが、楕円形プランを呈し、南東－北西方向に主軸をとる。掘方は直立し、深さ20㎝弱である。縄

文土器が出土した。

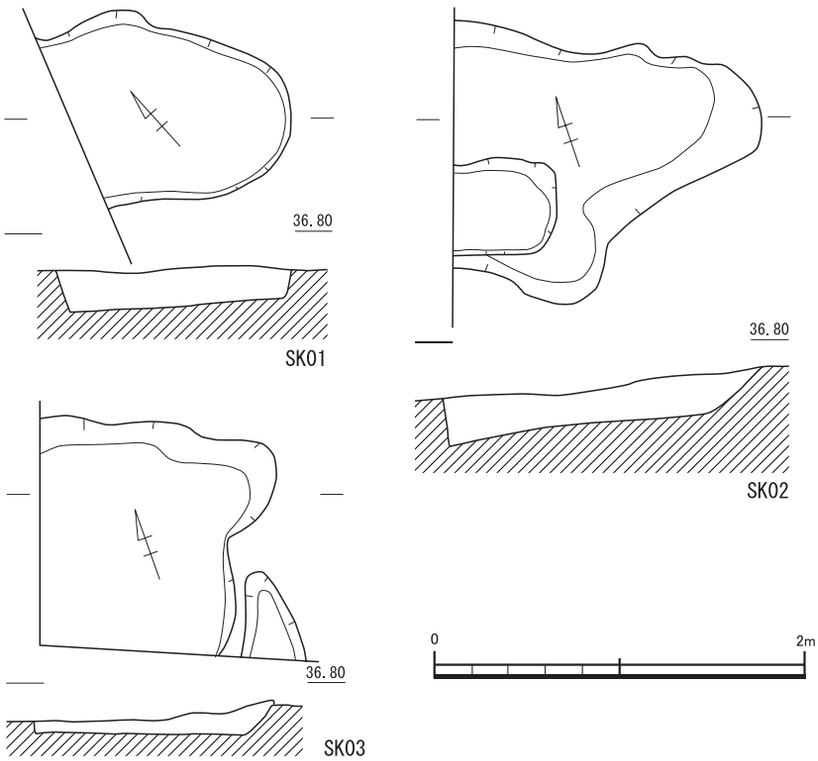
出土遺物（図版３、第５図）

縄文式土器

深鉢（１）胴部の断片資料である。内外面に横方向の条痕が認められる。色調は茶灰色で、外面に煤が付着する。胎土に白砂粒を多く含み焼成は良好である。

ＳＫ02（図版１、第４図）

ＳＫ01の南に隣接する遺構である。調査区外へ伸び、全様は知れないが、不正形プランで、深さ20㎝程を検出した。南辺の膨らみはピットを同時に掘った結果かもしれない。また、土坑底には更に長方形に近いプランのピットを検出したが、本遺構との関連性は不明である。埋土中から須恵器、土師器が出土した。



第4図　各土坑実測図

出土遺物（図版３、第５図）

須恵器

杯蓋（２）口縁部の破片資料である。天井部は丸みがあり、口縁部との境に明瞭な段と沈線を持つ。口縁端部は小さく外反し、内面に段を作り出す。胎土に砂粒は少なく、焼成は良好である。灰白色を呈するが、外面は黒色が強い。

杯身（３）蓋受けの立ち上がり部分の破片である。立ち上がりは直線的に内傾するが、中ほどから外に開き直立させるため、内面に鈍い稜を造る。端部は丸く仕上げる。調整は残存部ではヨコナデによる。胎土に白色砂粒及び黒色細粒を含む。黒灰色を呈し、焼成は堅緻である。

土師器

甕（４）直線的な胴部を持つ小型の甕である。口縁部から底部にかけて大略2/3程残存し、ほぼ全様が知れる。平底から膨らみの無い胴部はその先端を小さく外反させ、口縁部としている。全体的に器壁は厚く、手捏ね風である。体部外面は縦方向のハケ目が残るが、底部は未調整のままで、押さえた際の爪の痕跡が残る。内面は上位にハケ状の痕跡が残り、下位は削りの後ナデられる。口縁部は波打っており端部外面は未調整だが、内面はヨコナデされる。胎土に白砂粒を含み、焼成は良好である。黒茶色を呈する。

ＳＫ03（図版１、第４図）

調査区の南西隅に検出したもので、調査区外へ延びて全様は不明だが、検出した部分から方形の

プランを呈するものと思われる。検出部分で２ｍ＋αの等距離のコーナーをなすが、断面でみる立ち上がりは傾斜がつき、住居址とするには無理がある。深さ７～17㎝程と浅いもので、東辺は隣接するピットの影響かプランが乱れている。埋土中から須恵器片が出土した。

出土遺物（図版３、第５図）

須恵器

杯蓋（５）身受けの返りが付かないもので、大略1/3を残す資料である。天井部は平坦で、つまみは付かない。口体部は僅かに膨らみを持ち、口縁部へ連なる。口縁部は嘴状に作り、端部を下方へ引出し、その先端を屈曲させ外方へ開く。そのため端部外辺に沈線が廻る。天井部外面はナデ仕上げし、天井部内面は強い横方向のナデで、内面のナデの際手持ちで行ったらしく、天井部外面には指頭痕が顕著に残る。他はヨコナデによる仕上げである。内外とも暗灰色だが、内面の口縁に沿って弧状に黒色化が見られる。また、外面には口縁端のやや上位に他器種の残片が融着していて、上下の重ね焼きの痕跡を残す。

その他の遺構と遺物

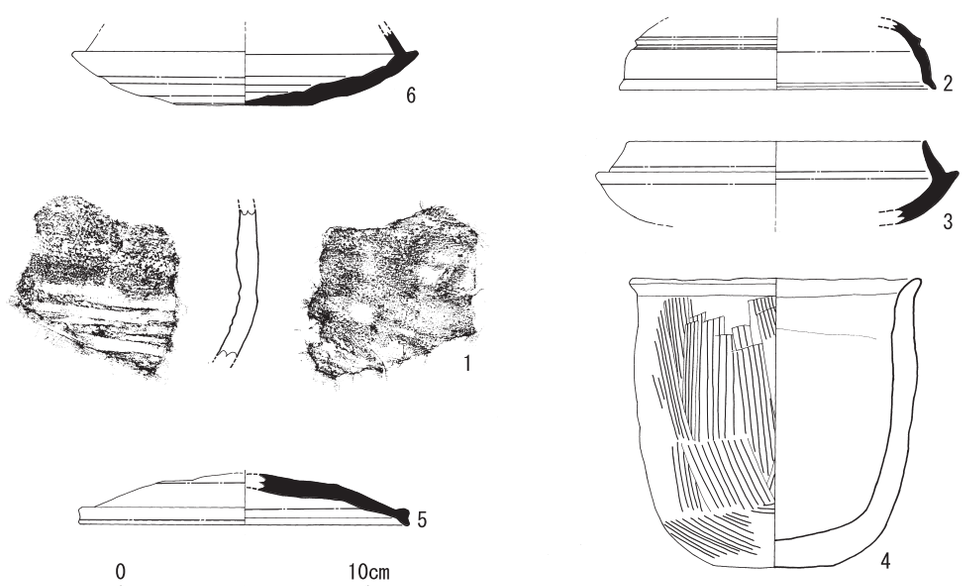
ＳＰ07（図版１、第３図）

調査では性格不明なピットを多数検出したが、出土遺物のあったピットについて触れておく。ＳＰ07はＳＫ01の北辺に隣接して検出したもので、西側は調査区外に延びていて形状は不明である。須恵器片が出土した。

出土遺物（図版３、第５図）

須恵器

杯身（６）立ち上がりの先端部を欠くが、全体の1/4を残す。立ち上がりは直線的に立ち上がるが、長さは不明である。底部は平坦で、体部、受け部にかけて扁平なプロポーションである。天井部外面は2/3程ヘラ削りされ、天井部内面の中心部を強く指でナデ押さえ、この部分だけ器壁を薄くする。他はヨコナデによる仕上げ。黒灰色を呈し、焼成良好である。



第5図　各遺構（SP07、SK01、SK02、SK03）出土土器実測図（1/3）

包含層出土遺物（図版３、第６図）

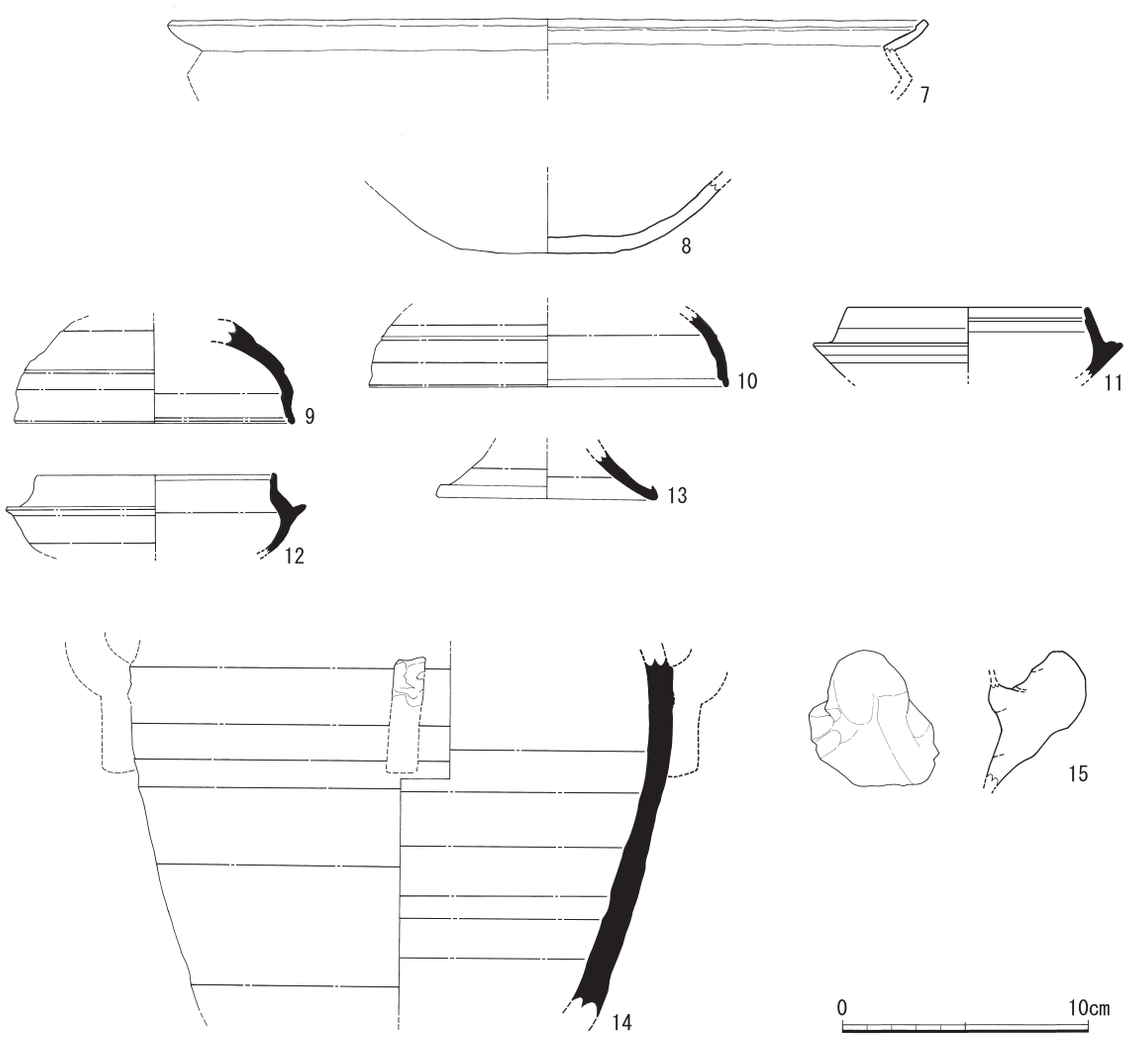
縄文式土器

浅鉢（７・８）　７は口縁部の小片。屈曲した口縁部は内湾気味に開き端部に小さな段を造り断面方形に仕上げる。胎土は精良で焼成は良好である。茶褐色を呈し、口縁内面の一部に黒班が認められる。８は底部の資料である。平底気味の丸底で、胎土に砂粒を僅かに含む。色調は茶灰色で、黒班がある。外面は２次被熱で赤化している。

須恵器

杯蓋（９・10）９は天井部の器壁が厚く、ヘラ削りが弱い。口縁部との境は小さな段を作り下位を膨らませる。端部は丸く仕上げるが、内側に細い沈線を廻らす。口縁部内外はヨコナデ、天井部内面はナデにより仕上げられる。色調は暗灰白色で、焼成は良好である。10は口縁部の細片である。天井部と口縁部との境に小さな突起を廻らす。内湾気味の口縁は端部を丸く収めるが、端部内面に段を作る。胎土は精製されるが２㎜程の白砂粒を僅かに含む。青灰色で焼成良好。

杯身（11・12）　11は直線的に内傾して立ち上がるもので、小片の資料から図上復元した。立ち上



第6図　第2次調査包含層出土土器実測図（1/3）

がり端部は丸く収めるが、内面に段を廻らす。立ち上がり基部と受け部の境は棒状工具を使って凹線を作り、受け部側が小さく隆起する。黒灰色を呈し焼成は良好である。12は小片からの復元である。立ち上がりは器壁が厚く内傾するが、中位から薄く直立気味に引き上げる。端部は丸く収めるが、内側に沈線を廻らす。底部外面のヘラ削りは受け部下１㎝まで及ぶ。灰白色で焼成は良好である。

高杯（13）　脚の断片資料である。裾端は跳ね上げるように小さく折り曲げる。内外ともヨコナデ調整され、黒灰色で焼成は堅緻である。

瓶子（14）　双耳瓶子の胴部片である。胴部上位に耳を貼り付けた痕跡が残る。内面はヨコナデ、外面の下半はヘラ削り、上半はヨコナデが施される。内面は茶橙色、外面は茶灰色を呈し、焼成は軟質である。

土師器

把手（15）　小型の把手で、粘土塊を角状に引出し、更に粘土をかぶせて造形している。大方は指ナデにより成形されるが、下部にはヘラ削りが認められる。焼成は良好である。

２．第３次調査

（１）調査の概要

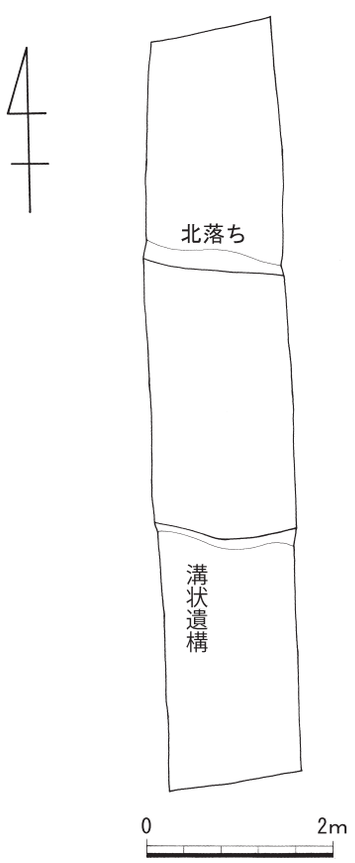
第３次調査は大城３丁目160－11で実施した。経過にも述べたように、遺構面より相当高く盛土されており、第２次調査を実施した隣接地ではすでに住宅が建設中で、掘り下げるのに影響が大きかった。第２次調査と同様、盛土を域外へ搬出し、遺構面を出したが、隣地住宅の基礎確保や法面傾斜の保全等制約が多く、結果的に調査できたのは約13㎡で、遺構等は不明確であった。

（２）検出遺構

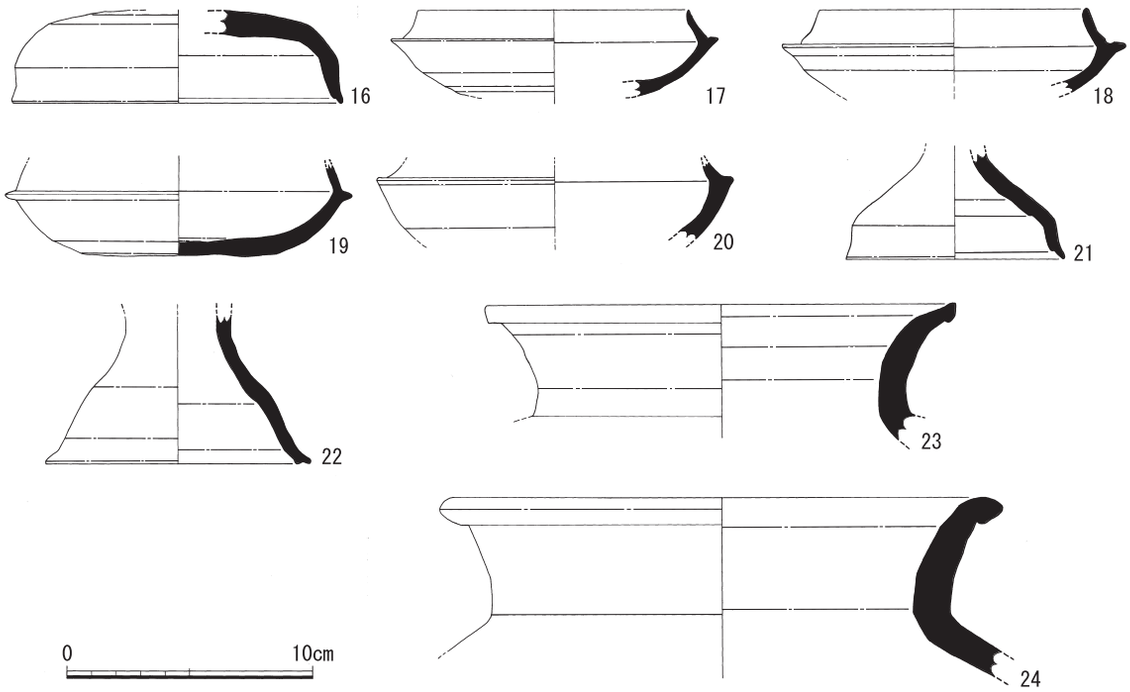
調査区の北端から2.5ｍのところに北に落ちる段落ち、南端から2.5ｍ程の所に南に落ちる段落ちを検出した。北部の段落ちは、礫層で鉄分の混入した荒砂交じりであり、土器等は含まず、洪水等の流れの痕跡と思われる。一方、南部の落ちは黒色系の粘質土が埋土として入り込み須恵器片が多く出土したので、対岸の肩は検出していないが、溝状の遺構としてとらえた。ただし、調査面積が狭く、丘陵上位の遺跡を流した土石流の痕跡の可能性もある。

出土遺物

出土した遺物は、溝状遺構から須恵器が、遺構検出時や包含層から縄文式土器、須恵器、土師器が出土した。



第7図　第3次調査遺構配置図



第8図　溝状遺構出土土器実測図（1/3）

溝状遺構出土遺物（図版２、第８図）

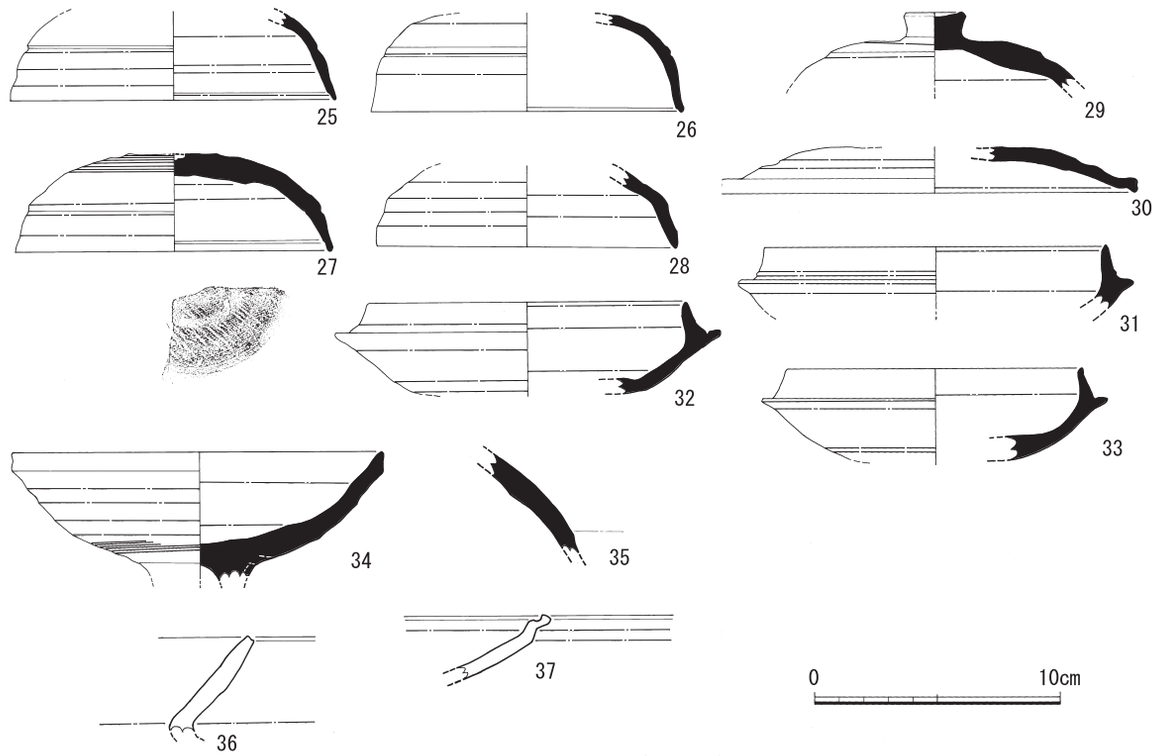
須恵器

杯蓋（16）口縁部がほぼ直角に近く屈曲するもので、器壁は厚い。口縁端部は外に開き内面に小さな段を作る。天井部と口縁部の境は段や沈線を廻らさない。天井部外面の大半をヘラ削りし、内面は中心近くに不定方向のナデを施し、他はヨコナデである。胎土に２㎜以上の砂粒を多く含み、焼成は良好である。

杯身（17 ～ 20）17は立ち上がりが器壁を薄く引き上げ、中位で直立気味にして、端部は丸く収める。立ち上がりの基部は受け部との境が明瞭で、外面には沈線を廻らし、内面には明瞭な線が認められる。底部外面はヘラ削り、内面には青海波の叩き痕が残る。18は17に比べ立ち上がりが高く、受け部との境に棒状の工具を当てて、凹線状に廻らす。外面受け部端まで青灰色を呈し、堅緻な焼き上がりなのに対し、立ち上がり及び内面は灰橙色を呈し、蓋をして焼成されたことが分かる。19は立ち上がり端部を欠くが直立する。内面には受け部近くまで叩き痕が残る。外面は器壁が荒れるほど高熱を受けている。20は他と違って肉厚である。立ち上がりは端部を欠くが、そう高くはならないものと思われる。灰白色で焼成軟質である。

高杯（21・22）いずれも脚部の破片資料である。壺等の脚かもしれない。21は脚裾近くを直角に折り曲げ、端部に至るものである。端部は細く引出し僅かに外反させる。端部内面は幅広の凹線を廻らし段をなす。内外ともヨコナデ調整される。青味のある灰色で、焼成は良好である。22は脚裾を膨らませ、緩いＳ字状をなして端部へ至る。端部は外方へ水平に引出し、畳付は平坦面を成すが中央に沈線を入れる。内外ともヨコナデ調整される。胎土に砂粒を多く含み、灰黒色を呈して、焼成は堅緻である。

甕（23・24）23は直立気味の頸部に小さく外反する口縁部を持つ。口縁端部は小さく角状に膨らま



第9図　第3次調査包含層出土土器実測図（1/3）

せ、内面にゆるい凹面を作る。僅かに残る頸部内面に青海波の叩き痕が認められ、外面にはヨコナデの下に縦方向のハケ目が見られる。その他は、ヨコナデ調整される。青味を帯びた灰色を呈し、焼成は良好である。24は同じく口頸部の破片資料である。直立気味の頸部の先端を瘤状に折り曲げて口縁部としている。肩部外面にカキ目状の痕跡が認められる。胎土は精良で、砂粒をほとんど含まない。色調は灰白色で焼成は軟質である。

包含層出土遺物（図版４、第９図）

須恵器

杯蓋（25 ～ 30）25は薄い作りの口縁部片である。肩部に小さな凹線を入れて段をなす。口縁部は開き気味に下り、端部を丸く仕上げる。端部内面に小さな段を作る。内外ともヨコナデによる調整である。26は膨らみのある形態で、肩部に稜を作りその下位に沈線を廻らす。口縁部は端部を僅かに外反させ、丸く仕上げる。端部内面には沈線を廻らし、小さな段をなす。天井部外面はヘラ削り、その他はヨコナデされる。暗灰色で焼成良好である。27は肩部に稜を作りその下位に横線を廻らして口縁部との境をなす。26と比べ口縁部は短く半分ほどの長さである。口縁端部はやや外方に屈曲させ、端部は丸く収める。端部内面には凹線を廻らすが、浅いもので、段は鈍い。天井部外面にはカキ目状の条痕が廻り、ほぼ中央部にあたる箇所の欠損状態からつまみが付いていた可能性がある。天井部内面には平行叩き痕がヨコナデの下に残る。胎土は精良に近く、砂粒をあまり含まない。内面黒紫色、外面暗灰色で、焼成はやや軟質である。28は肩部が屈曲するが、沈線も段も無い。器壁は厚く、口縁部は外方へ開きながら、やや尖り気味に収める。端部には棒状の圧痕が残る。天井部外面はヘラ削り、他はヨコナデにより仕上げられる。緑味を帯びた灰色で、焼成はやや甘い。29は

釦形のつまみが付くもので、天井部に段を有す。筒状のつまみは上部を凹ませている。つまみを貼り付けるため、天井部内面は窪んでいて、その周囲は不定方向のナデが見られる。外面は段の所までヘラ削りされ、つまみを付けてからヨコナデされる。胎土に砂粒を多く含み肌が荒れている。色調は青味のある灰色で、焼成は良好である。30は身受けの返りが付かないもので、全体的に扁平である。器壁はほぼ同一で、口縁端部は下方に少し膨らませて瘤状にしている。天井部と口縁部の境は幅１㎝程の窪みがあり、この上下はヘラ削りされるが、天井部は未調整で、器面は凹凸がある。他はヨコナデによる調整である。色調は灰色で、口縁部外面の１㎝程は弧状に黒化して重ね焼きの痕跡を残す。

杯身（31 ～ 33）いずれも直線的に内傾する立ち上りを持つもので、端部は丸く仕上げる。31は器壁が厚く、立ち上がりの基部と受け部との境は明瞭でない。32は立ち上がり端部は尖り気味で、受け部との境は沈線を廻らす。内底部にナデ消されているが、叩き痕がみとめられる。33は立ち上がりがやや短めで、端部を小さく外反させる。基部と受け部の境に沈線を廻らす。内底には青海波の叩き痕が残る。外底部はヘラ削りされ、他はヨコナデである。

高杯（34）杯部の大略1/3を残す資料である。杯部は中位に鈍い稜を作りながら､内湾して立ち上り、玉縁状の口縁に至る。口縁端部は外面に稜を作り、先端部を上方へつまみ上げるため、中央がやや窪んだ平坦面を成す。外底部は杯部中位までヘラ削りされ、脚の接合部付近にカキ目状の条痕を廻らす。内底部がナデの他はヨコナデされる。色調は黄橙色で焼成は軟質である。

土師器

壺（35）胴部の断片資料である。内面はヘラ削り、外面は調整不明瞭である。赤橙色で外面に黒班がある。胎土は精良で、焼成は良好である。

甕（36）　布留系甕の口縁部片である。内湾気味に外反する。口縁端部は一部をつまみ上げるため沈線状が廻る平坦面となる。内面はヨコナデ、外面にはハケ目状の痕跡が残る。

縄文式土器

浅鉢（37）Ｓ字状に屈曲する口縁部の破片資料である。器壁が荒れ、調整等不明である。

Ⅳ．まとめ

今回報告の調査では、調査面積が狭いこともあって、顕著な遺構は検出できなかった。２次調査では土坑やピットを検出し生活跡を確認できたが、その性格については不明である。

３次調査については、その埋土の状態から溝状遺構としたものを検出したが、これも不明確で、調査区を覆った砂礫に含まれる須恵器の年代から６世紀中から後半の自然災害の痕跡のようにも思われる。この砂礫中に含まれる須恵器は近辺の生活跡あるいは、現在も残骸が残る上方の古墳群から流出したものと思われるが、いずれにしても１次調査で検出した５世紀後半から６世紀後半の遺跡の範囲が今回調査地まで広がることが確認できたのは成果として挙げられる。

また、出土土器はこの原田遺跡の発見の端緒になった縄文期から奈良期の土器までが出土しているが、包含層出土の須恵器杯蓋（27）に北東４㎞にある雉子ヶ尾窯製品にみられる平行叩きを残すものがあり、その需給関係の一端を窺うことができる。

図　　版

第2次調査全景（南から）

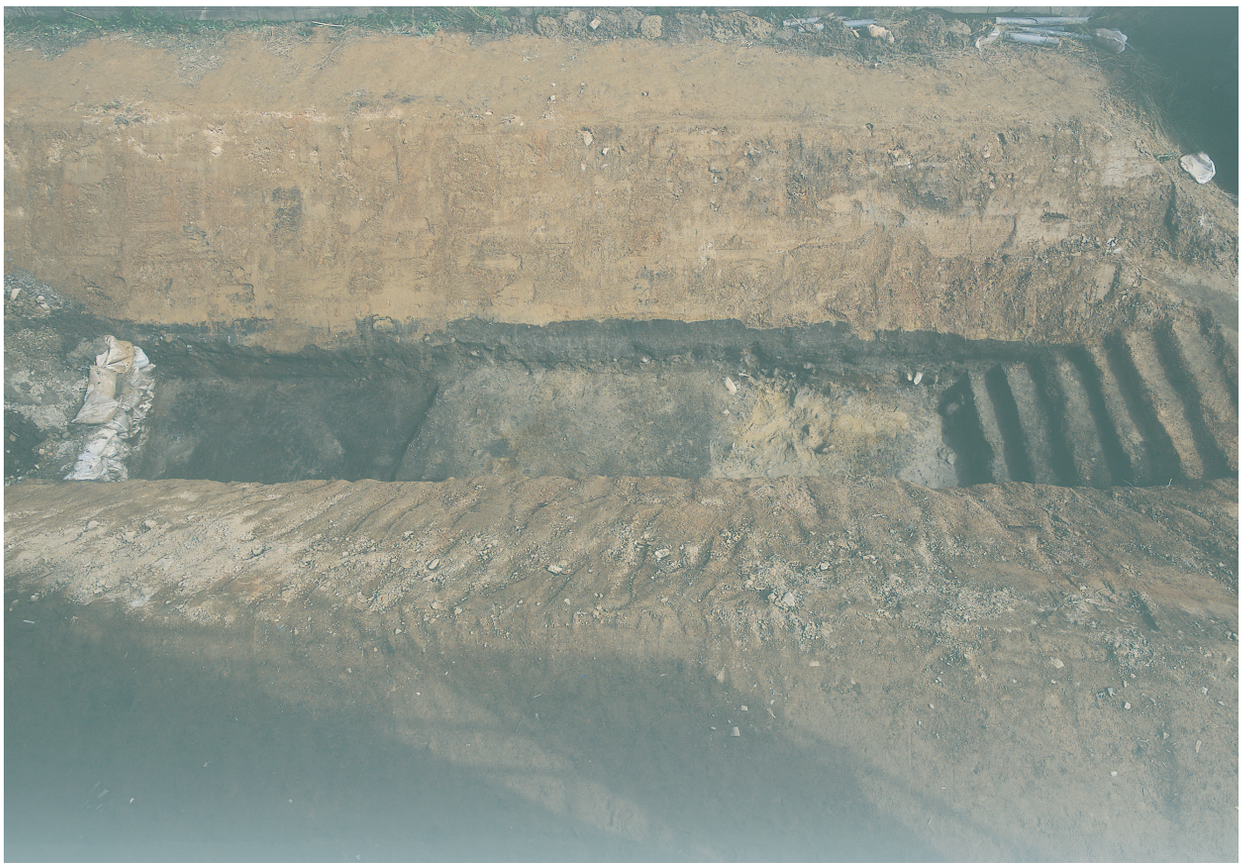
SK01・SK02

調査区南部

SK03

北部のピット群

図版2



第3次調査全景（西から）

溝状遺構

北部落ち

溝状遺構土層

礫層

出土遺物 1

図版4

16

17

21

22

23

27

29

32

34

出土遺物２

報 告 書 抄 録

ふ り が な	はらだいせき
書 名	原田遺跡２
副 書 名	第２・３次調査
巻 次	２
シ リ ー ズ 名	大野城市文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第171集
編 著 者 名	澤田　康夫、神　啓崇
編 集 機 関	大野城市教育委員会
所 在 地	〒816-8510　福岡県大野城市曙町２－２－１
発 行 年 月 日	2019年３月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯 ° ′ ″	東 経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はらだ 原田遺跡	ふくおかけんおおのじょうしおおき 福岡県大野城市大城３丁目 160-9、160-11	402192		33° 32′ 06″	130° 29′ 47″	2017年 ８月17日 ～ 2017年 10月27日	約63㎡ (2次50㎡) (3次13㎡)	民間 宅地 開発

所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
はらだ 原田遺跡	集落等	古墳時代 後期	土坑３基・ ピット・溝状遺構	土師器・須恵器・ 縄文土器	

要約	性格不明な土坑状遺構の他、顕著な遺構は検出しなかったが、不明確だった原田遺跡の遺構の広がりを確認できた。また、包含層の出土ではあるが、４㎞程離れた雉子ヶ尾窯の製品が見つかり、その需給範囲の一端を知ることができた。

原 田 遺 跡 2

大野城市文化財調査報告書　第171集

平成31年３月29日

発 行　大野城市教育委員会
〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1

印 刷　山口印刷株式会社
〒848-0035 伊万里市二里町大里乙3617-5